昔、男**あり**けり。（過去「けり」終／ラ変・用）その男、身をえうなきものに**思ひなし**て、（形・ク活用・体／四段・用／打消意思「じ」終／ラ変・未）京には**あら**じ、東の方に**住む**（四段・終）べき国**求め**に（適当「べし」体／下二・用）とて**行き**（四段・用）けり。（過去「けり」終）もとより友と**する**（サ変・体）人、ひとりふたり**行き**（四段・用）けり。（過去「けり」終）道**知れ**（四段・已）る人もなくて、**惑ひ行き**（四段・用）けり。（存続「り」体／過去「けり」終）三河の国八橋と**いふ**（四段・体）所に**いたり**（四段・用）ぬ。（完了「ぬ」終）そこを八橋と**いひ**（四段・用）けるは、（過去「けり」体）水**ゆく**（四段・体）河の蜘蛛（くもで）手なれば、（断定「なり」已）橋を八つ**渡せ**（存続「り」体）るに（四段・已）よりて（なむ係助）八橋と**いひ**（四段・用）ける。（過去「けり」体）その沢のほとりの木の陰に**下りゐ**（上一・用）て、乾飯（かれいひ）**食ひ**（四段・用）けり。（過去「けり」終）その沢にかきつばたいとおもしろく**咲き**（形・ク活用・用）たり。（存続「たり」終）それを**見**（上一・用）て、ある人のいはく、「かきつばたと**いふ**（四段・体）五文字を句の上に**据ゑ**（下二・用）て、旅の心を**よめ**（四段・命）。」と**言ひ**（四段・用）ければ**よめ**（四段・已）る。

唐衣　**きつつなれ**（上一・用／下二・用）にし　つまし**あれ**（ラ変・已）ば
はるばる**き**（カ変・用）ぬる（完了「ぬ」体）　旅をしぞ（副助／係助）**思ふ**（四段・体）

と**よめ**（四段・已）り（完了「り」用）けれ（過去「けり」已）ば、みな人、乾飯の上に涙**落とし**（四段・用）て、**ほとび**（上二・用）に（完了「ぬ」用）け（過去「けり」終）り。

昔男がいた。その男は、自分の身を何の役にも立たないものと思って、
都にはいるまい、東の方に住むのによい国を探そうと思って行った。以前から友達だった人一人、二人と一緒に行った。道を知っている者もいなくて、迷いながら行った。
三河の国の八橋というところに着いた。そこを八橋と言ったのは、川が蜘蛛の足のように八本になっていたので、端を八つ渡していることによって八つ橋と言った。その沢のそばの木の陰に馬から降りて座って、乾飯を食べた。その沢にかきつばたがたいへん美しく咲いていた。それを見て、旅をともにするある人が言うことには
「かきつばたという五文字を句の始めに置いて、旅の気持ちを詠みなさい。」と言ったので詠んだ。
着慣れたから衣のように、長年慣れ親しんだ妻が都にいるのでこんなに遠くまで来てしまった旅を悲しく思います
と詠んだので、そこにいた人はみんな乾飯の上に涙を落として、
乾いた米がふやけてしまったのだった。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/